私は貴方の為に??。

白い灰

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１話完結になってます。続きはありません！

目　次

私は貴方の為に??。 ―――― 1

私は貴方の為に??。

私の灯火は後少しで消えるか消えないかの時だった。
私はふと過去について振り返っていた。
私は貴族の娘、バートリー・エルゼベートとして生まれた。
そんな私のそばには、何時も不思議な使用人がいた。
バートリー家を長きに渡り使用人として働き、それなのにずっと歳を取らない女性。
私のバートリ家の専属の使用人リラ。
何時からいたのかは分からない彼女曰くは数百年は軽く生きてるとか、とにかく不思議な女性だ。
私が多くの人々を殺めても幾度と無く彼女を傷つけても、それでも私のそばにいてくれた。
元々私の家を代々支えて来てくれていたらしく、私も彼女の事は母親のようにも思っていたから、彼女の事は特別、名前で読んでいたくらいだ。
そして、長い事の罪は世間に知れ渡り、私は罰として幽閉された。
「?リ??ラ???」

私は掠れた声で、ここにいない彼女の名を読んだ。
私が最初に彼女を殺めた頃、私の為に生きると誓ってくれた彼女??。
正直、私にとってこの暗闇の世界よりも、彼女がそばにいない事の方が何よりも辛かった。
彼女がそばにいなくなって、私がいかに彼女との日々がどれほど私を幸せにしてたかがハッキリと分かる。
気付いたら私は、何時もの癖のように彼女の名を呼び彼女がこの場にいない事を思い出しては悲しみに暮れる日々、何時しか私は彼女の名を呼びながら、彼女の面影を探す様になっていた。
だからこそ、私はハッキリと言える。私、バートリー・エルゼベートはリラと言う使用人の彼女の事が好きだったのだと??。
彼女がいなくなって気付くなど、皮肉な話だ。
そして弱り果てた私はここで聞こえるはずの無い足音を耳にする。
足音は段々と私の下まで近付いていき、私の近くまで来るとピタリと止んだ。
「??お嬢様??やっとお会い出来ました」
私は自身の耳を疑った。何故ならその声は私がもう聞くはずのない声だったから。
そして、私の身体は何者かに抱き寄せられる。

身体を通して伝わる優しい温もり、それら全ては私は二度と得る事は叶わないと思っていたものだった。

あぁ、これは夢なのだろうか??だとしたら覚めないで欲しい、もはや私はこの温もを二度と失いたくないから。

「もう離しません??今度こそ最後の時までお側に??」

私はその言葉を耳にして安息の中、意識を手放す。

ねぇ、リラ??さっそくだけど久々に貴方の紅茶が飲みたいわ??。

それから、二人して楽しく昔のように楽しく談笑して??それから??罰として???私の我儘を????いっぱい??聞いてもらうから????覚悟し???な?さ???。